



## 7. 達成手法

### 7-1. リーディングプロジェクト

リーディングプロジェクトとは、次頁以降に挙げる各項目のような、屋外共用空間や全学的な福利厚生施設などについての、重点項目としての整備である。次頁以降の各項目以外でも、施設マネジメント委員会等で決定された計画もふくまれる。

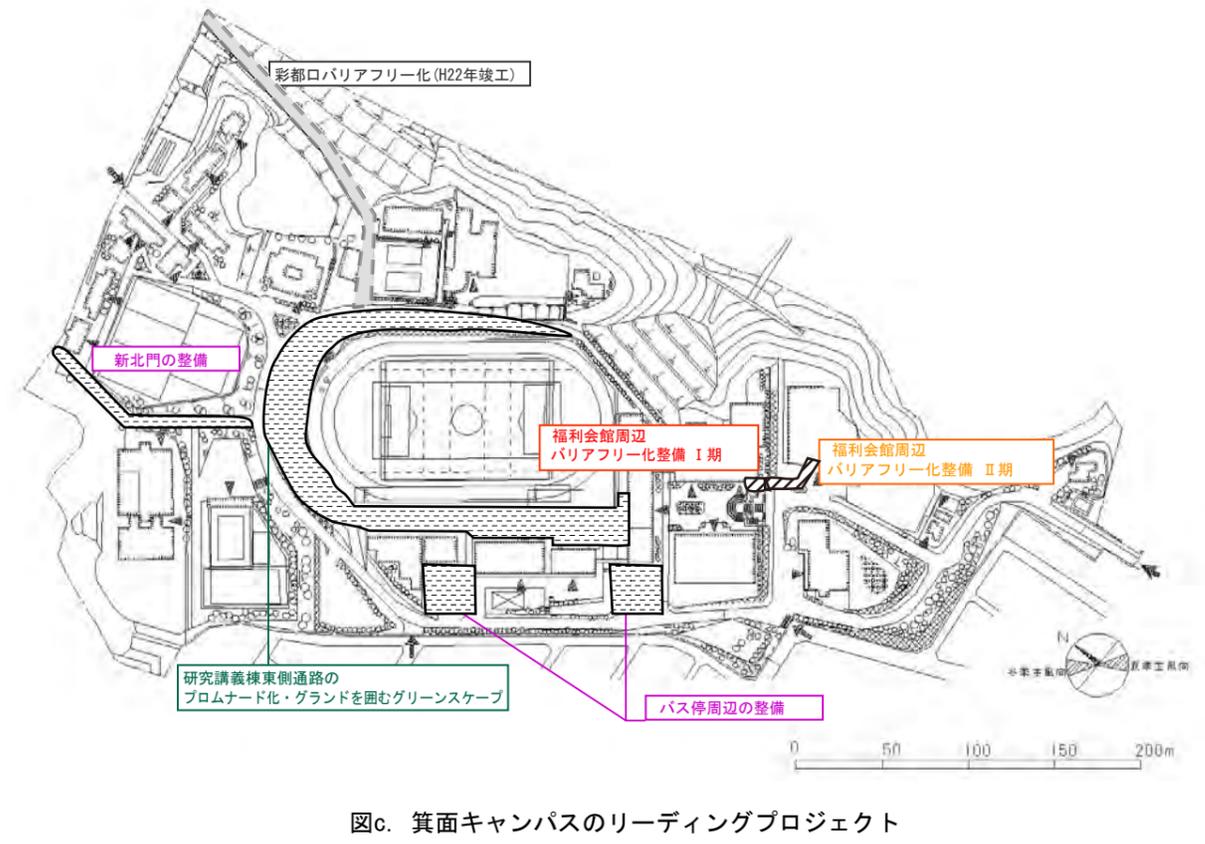
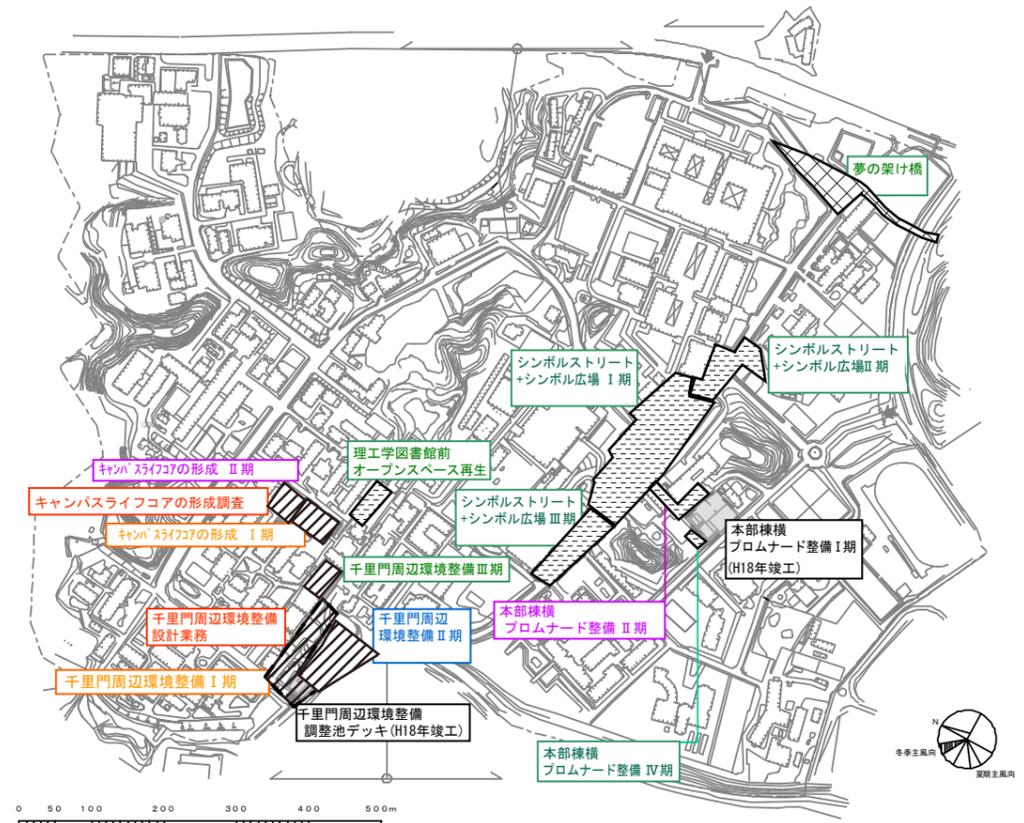
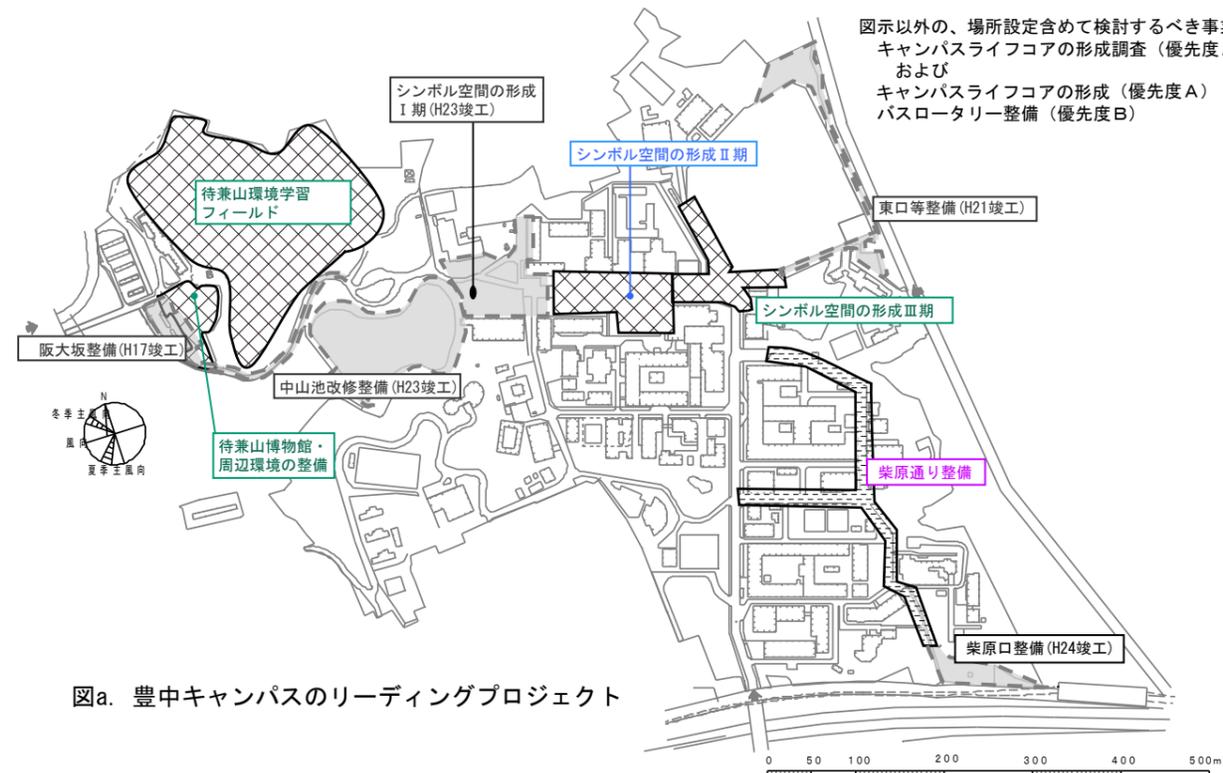
図a.～c. がそれぞれのキャンパスでの、現時点のリーディングプロジェクトであり、表a. はその優先順位の考え方の一例である。ただしこれらの優先順位は、その時々状況によって評価が変わりうることに注意されたい。

表a. 優先順位検討項目（総合優先度は、各評価をA=3、B=2、C=1、S=5として評価）

キャンパス・計画名	(1) 緊急度	(2) 学生福利・利便性	(3) キャンパス間バランス	(4) 重要度(空間補完)	(5) 方針確定度	総合優先度
全キャンパス共通 全体地図標識等新設補完	A	B	A	A	A	A
<b>豊中キャンパス</b>						
浪高庭園より東 文系中通り等	C	B	C	C	B	C
待兼山環境学習 フィールド	C	C	C	C	C	C
待兼山博物館 ・周辺環境の整備	C	C	C	B	C	C
バスロータリー整備	B	B	C	A	C	B
柴原通り整備 (基礎工・理学部歩行者空間)	C	B	C	B	B	B
(豊中) ライフコア 形成検討	A	S	B	B	C	A
<b>吹田キャンパス</b>						
吹田キャンパスのシンボル空間の形成 ・本部棟プロムナード整備 ・シンボルストリート・シンボル広場整備	C	B	B	A	B	B
吹田キャンパス ライフコアの形成	A	S	A	B	C	A
千里門周辺環境整備	B	A	A	A	B	A
理工学図書館前 オープンスペースの再生	C	B	B	A	B	B
夢の架け橋整備事業	C	C	B	C	C	C
<b>箕面キャンパス</b>						
福利会館周辺 のバリアフリー化	A	B	A	A	A	A
新北門の整備	B	B	A	B	C	B
研究講義棟東側通路の プロムナード化・グラウンドを 囲むグリーンスケープ	C	B	A	A	C	B
バス停周辺の整備	C	A	A	B	C	B

凡例（各図共通）

- 竣工
- 総合優先度 A
- 総合優先度 B
- 総合優先度 C





学生のキャンパスライフを支援する福利厚生施設のあり方とその整備手法

優秀な学生を獲得して世界レベルの教育・研究を持続するためには、キャンパスライフの充実が極めて重要な課題である。豊中キャンパスでは大阪外国語大学との統合以来、学生数が増え、食堂の混雑の問題が顕著となった。同時に、来客を最低限もてなすことができるようなレストランも存在しない(過去にはあったが、経営上成立しなくなった)。これら食堂・レストラン等については、数量的充足だけでなく、学生が考え事や議論をすることができるゆとりある空間づくりという側面にも注力しなければならない。

また吹田キャンパスにおいても、食堂から極めて離れた研究科等があったり、学外近隣に飲食店がほとんど無いことなど、多くの学生や教職員が不便を感じている。

さらに外国からの研究者の短期滞在、寮や、留学生との混住の問題など、宿舎関係を充実する必要性、ならびに書店その他一般の店舗、ジム等のスポーツ施設に対する要望についても対処していかなければならない。

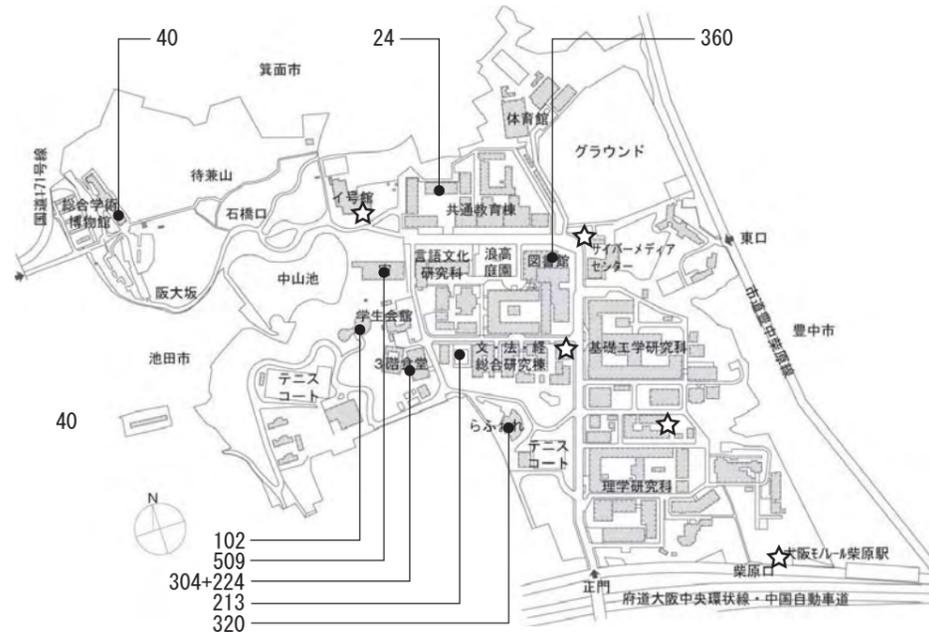
施設整備にかかる経費は今後ますます競争的になり、従来の手法による整備では実現がいつになるかわからない。ニーズの詳細調査を行ったうえで、民間事業者の誘致などの整備手法に重点をおいて、箕面キャンパスも含めて検討をすすめる必要がある。

豊中キャンパスでの福利厚生施設配置の考え方

図aは、豊中キャンパスに存在する食堂・レストラン等の配置(平成24(2012)年3月現在)と、今後計画することが考えられる場所のプロットである。

各所の与条件を整理したうえで広く民間の事業者に対してレストラン等の出店意欲を問う調査を行い、できるだけ大学側の経費がかからない方法で整備する方策を検討する。

食堂・レストランだけでなく、上述の各種店舗やスポーツ施設についても、また吹田キャンパス・箕面キャンパスについても、同様の検討を行うことが重要と考えられる。



図a. 豊中キャンパスでの現状の食堂等配置(数字は席数)と考えうる拡充整備候補地(各候補地については、関係部局との十分な協議・調整が必要である)

吹田福利会館の現状・課題と計画の方針

工学部エリアの吹田福利会館には、食堂、売店、書店などが設置されており、吹田キャンパス北側における生活基盤施設として重要な位置づけにある。この場所を例にとって計画案の考え方を示す。

吹田福利会館ではハードの老朽化・狭隘化が進んでおり、またサービスの内容についても、充実したキャンパスライフをおくるためには、未だ不十分な面が多い。

この場所は、広大な工学部ゾーンを貫くT字型のオープンスペースネットワークの基幹に相当し、キャンパスの「図」を構成する施設やオープンスペースを整備することも求められている。

図cでは平成16(2004)年当時考えられていた増築と建替の2案を示しているが、基本的な考えを踏襲しながら様々な案を、上述のような資金・事業運営面を含めた整備手法と一体で検討しなければならない。

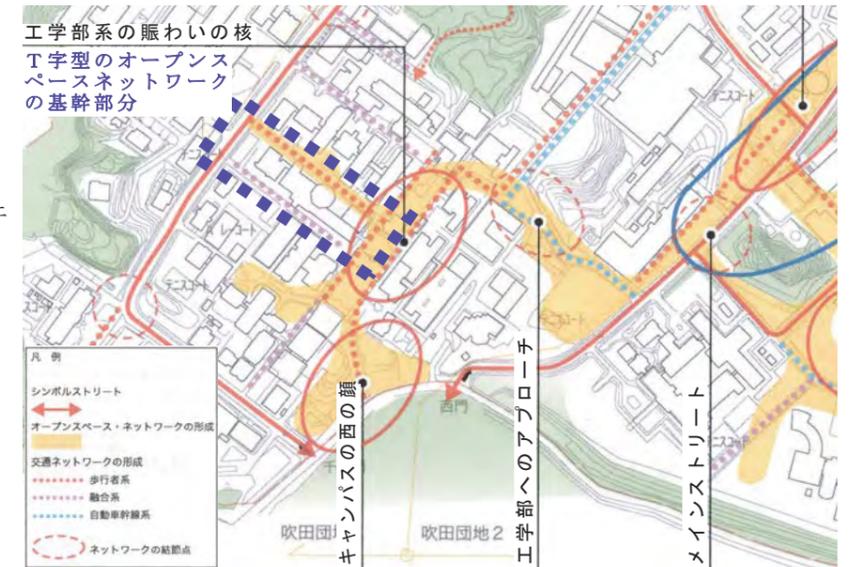
<吹田福利会館拡充の方針>

- ①以下の点に配慮しながら、増築案(A案)と建替え案(B案)を提示する。
- ②ライフコア機能の充実  
現状の機能に加えて、コンビニエンスストア、コーヒーショップ、屋台村、宿泊施設、学生ラウンジなどのスペースを拡充し豊かなキャンパスライフを支えるための拠点とする。B案では宿泊施設として、ホテル・アパートマン等を提案する。
- ③オープンスペースネットワーク(キャンパスの骨格への配慮)  
工学部エリアの中央軸から北側の原子力系、産業科学研究所方面に抜ける位置にあるため、両案ともモールやテラスを計画する。
- ④景観形成への配慮  
A案:整備当初の優れたモダニズムデザイン(既存食堂)を活かした計画案。  
B案:さくら環状通り沿いに6階程度の宿泊施設を配置しアクセントとする計画案。

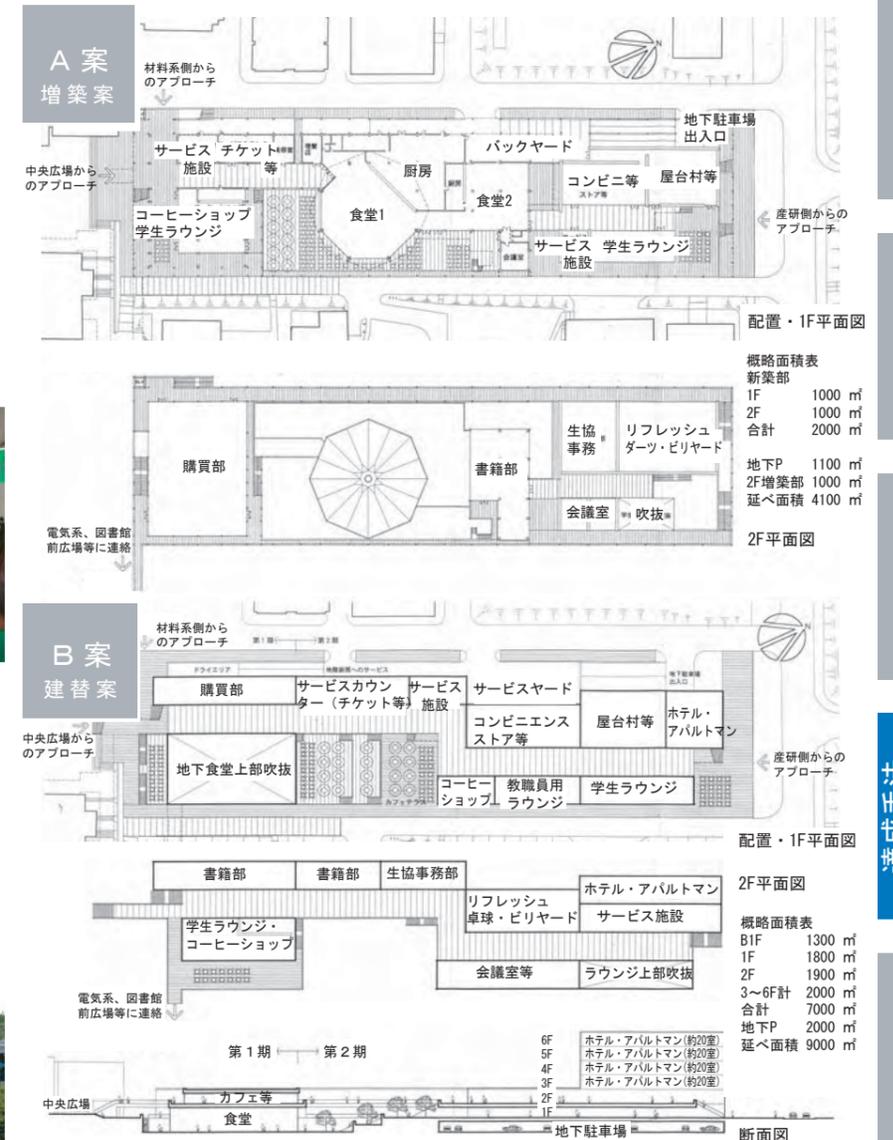


写真上:  
食堂ではイベントが行われることもあり、学生の様々な活動を誘発する上でも重要な施設である(写真上はサッカーワールドカップ時のパブリックプロジェクション)

写真下:  
現在の吹田福利会館の食堂部分屋根の形状が個性的。



図b. 吹田キャンパスでの主要な敷地候補の位置づけ



図c. 吹田キャンパスでのライフコア拡充案2案



現状の課題と経緯

全学教育機構と文法経・言語文化研究科等校舎群に囲まれたオープンスペースは、全学教育ゾーン、図書館、浪高庭園、食堂などが近接する公共性の高いエリアであり、大阪大学でも最も賑わいのある空間となっている。また、両端に中山池と乳母谷池が隣接し、両池との視覚的つながりや、親水性を確保することにより、大学のシンボルとして相応しい環境に生まれ変わるポテンシャルを有している。

しかしながら、現状は、大量の駐輪、鬱蒼とした庭園、図書館による圧迫などの問題が顕在化しており、シンボル空間形成の可能性が生かされていない。

大阪大学会館改修整備と学生交流棟北側の広場は、中山池の周回散策路整備とも合わせ、平成23(2011)年春に、80周年記念事業の一環として竣工し、豊中キャンパス全体の新しい中心的シンボル空間を形成した。浪校庭園、共通教育メインストリート、図書館北側、グランドコーナー部分、乳母谷池周辺についてもこれと呼応するかたちで整備することが望まれる。



平成23年春に完成した中山池周辺整備



平成23年春に完成した80周年記念整備による学生交流棟北側広場と、改修された大阪大学会館



メインストリートの美しい並木

■ 言語文化研究科棟 北側植栽地の現状の問題点等

■ アナツエダ  
強剪定による木切れ

■ トンモクセイ  
下枝が上がっているため、歩行者の視界が遮られる

■ アカシの群生  
樹高が高すぎるため、うごき回ることができない

■ モチノキ  
アカシに比べて葉が少なく、アカシの群生に比べて葉が少なく、アカシの群生に比べて葉が少なく

■ 葉のしたの木の穴  
大雨による葉の落下による穴の形成が顕著であるが、メインストリートと学生交流棟北側広場の間に設置できる

■ 緑地のサワラ、ツバキ  
サワラとツバキは、向陽の生育が早く伸びている。緑地は、サワラの根が深く、研究科棟は、東側の日照が得られるためサワラは生育している。緑地のサワラは、樹高が高くなる。

■ 緑地のサワラ(ツバキ、サザンカ)  
サワラとツバキは、向陽の生育が早く伸びている。緑地は、サワラの根が深く、研究科棟は、東側の日照が得られるためサワラは生育している。緑地のサワラは、樹高が高くなる。

■ コイスカイギ  
コイスカイギ(サザンカ)は、日照条件が悪い場所でも生育し、緑地の生育が早い。

メインストリート周辺の緑地の分析  
密度が高すぎ、樹木が健康に生育できていない

計画の方針

オープンスペースの再編、浪高庭園の整理、代替駐輪場の整備、建物とオープンスペースとの関係の改善により、シンボル空間としての質を総合的に形成していく。

● 乳母谷池側の親水性の改善

池の水際に、テラスやデッキなどを設けて、池を眺めたり、憩うことのできるスペースをつくる。

● グランドコーナー部分の整備

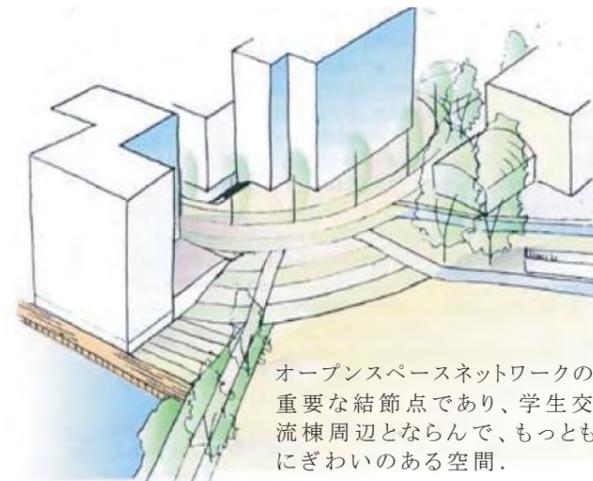
東西と南北の幹線街路が会う重要な結節点であり、視線がグランド側に向ける場所でもあるため、オープンスペースネットワークの重要なポイントとして、広場化する。モニュメント設置場所の有力な候補。

● 現駐輪スペースの代替駐輪場を整備

オープンスペース中央にある、現在の駐輪スペースを解消し、校舎側に駐輪場を代替する。

● 浪高庭園の再生

芝生等に再整備することにより、人が入り、集い憩えるスペースとする。



オープンスペースネットワークの重要な結節点であり、学生交流棟周辺とならんで、もっともにぎわいのある空間。

グランドコーナー部分の整備イメージ



メインストリート周辺の整備イメージ

メインストリート周辺の整備イメージ

浪高庭園の再生イメージ

学生交流棟北側広場 計画案1  
Scale 1/700  
0 10 20 30 40 50m





### 待兼山と総合学術博物館

待兼山は豊かな自然を残した場所であり、大都市近郊に残された貴重な緑であって、その地下には古墳群をはじめとして、弥生時代から近世にいたるまでの住居址や埋蔵文化財の存在することが確認されている。

待兼山の植物や昆虫の生態系を保護し、地下遺構を保存整備しながら、**待兼山全体を博物館と考え**、一体的な整備をめざすこととする。

阪大坂下は、主たる歩行者動線に位置する顔として、大規模駐輪場とともに平成18(2008)年に整備された。平成19(2007)年春には、登録有形文化財である旧医療短大跡の建物が、当初の建物意匠を保全しながら「待兼山修学館」として改修整備され、総合学術博物館の機能を担うこととなった。また平成24(2012)年春には、高機能収蔵庫が新築された。

### 環境学習等のフィールドとしての待兼山

待兼山は、もともとは炭の原料をとるために入会地の林として利用され、アカマツが優占する雑木林であり、典型的な「里山」であった。その後、遷移が進んでコナラクヌギ林へと移行してきており、今後はさらに常緑樹の割合が増えると言われている。

右図では、21世紀懐徳堂ほかが環境学習に活用しているルートを中心として示した上で、待兼山の環境学習フィールドとしての活用と維持管理の方針を示している。

さらに今後は、博物館や21世紀懐徳堂などによるアートイベント等のフィールドとしての位置づけも加え、重層的な活用をはかっていく。



- 北口周辺
- 石碑周辺
- 山頂周辺
- 低木がやや多様で四季を通じて観察しやすいスポット

・樹冠が開けて明るく、また低木や草本を中心に、比較的多様な植物や昆虫等を観察できる。  
・まとまった広さがあるため観察や講義のフィールドとして適している。

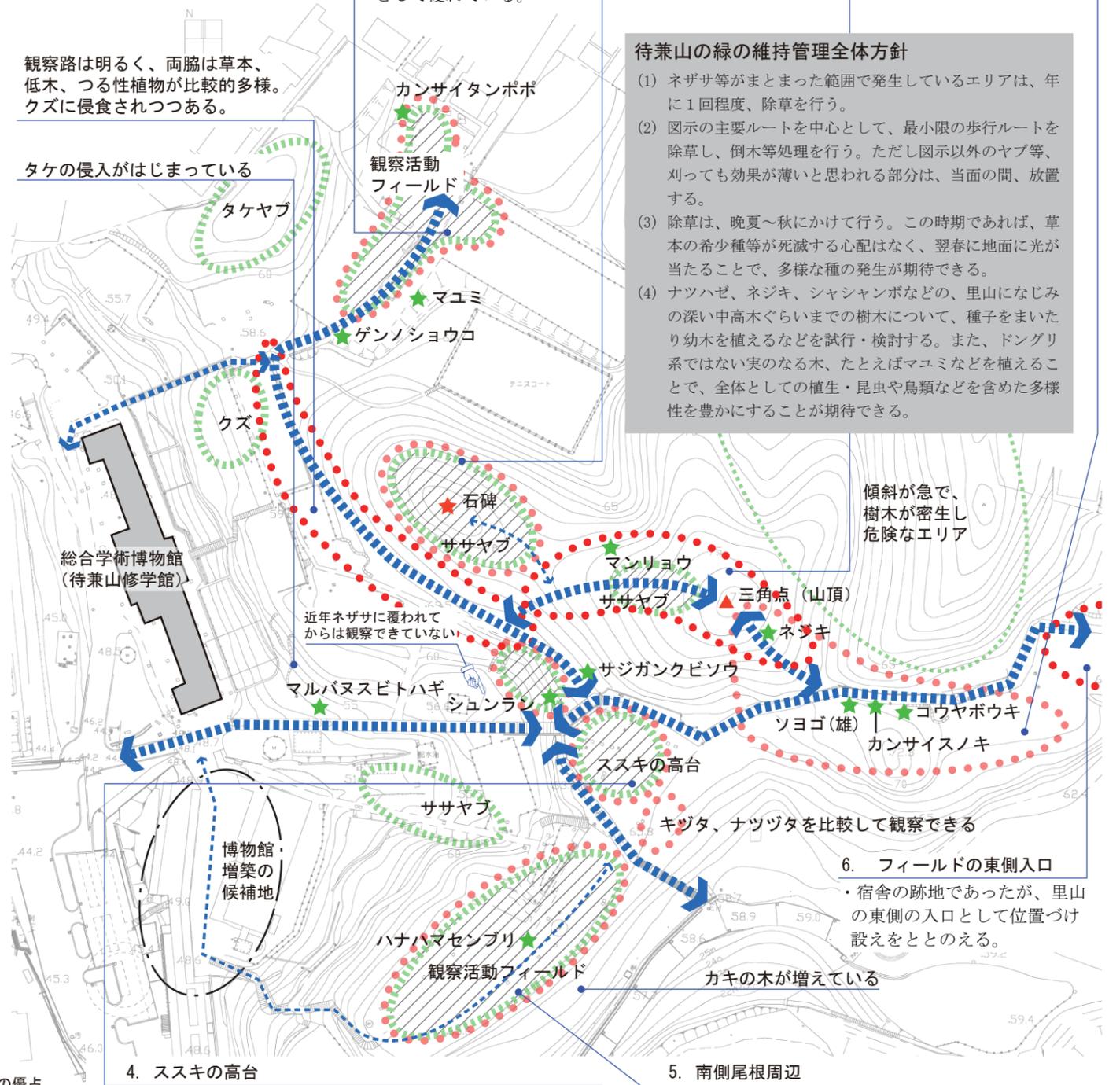
・全体として比較的明るいネザサが優占している。まとまった範囲のネザサを刈ることで、より豊かな植生への移行を期待できる。  
・石碑の存在により待兼山の歴史を解説するスポットとして優れている。

・全体として比較的明るいネザサが優占している。観察ルートに沿ってまとまったネザサを刈ることで、より豊かな植生への移行を期待できる。

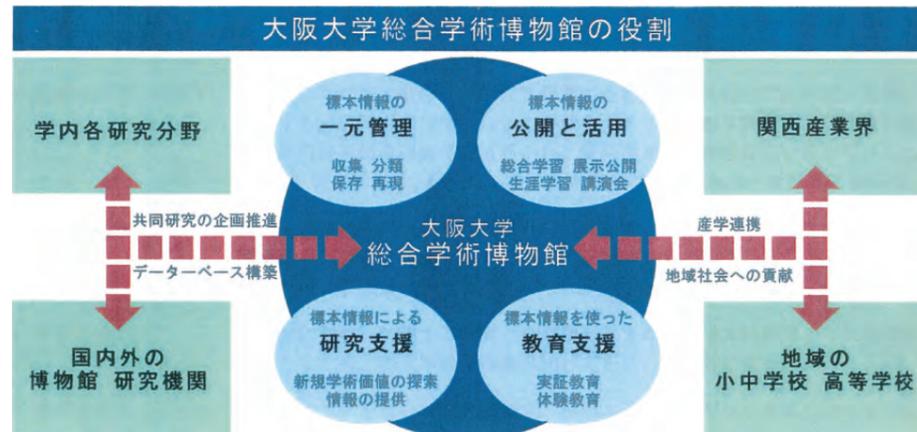
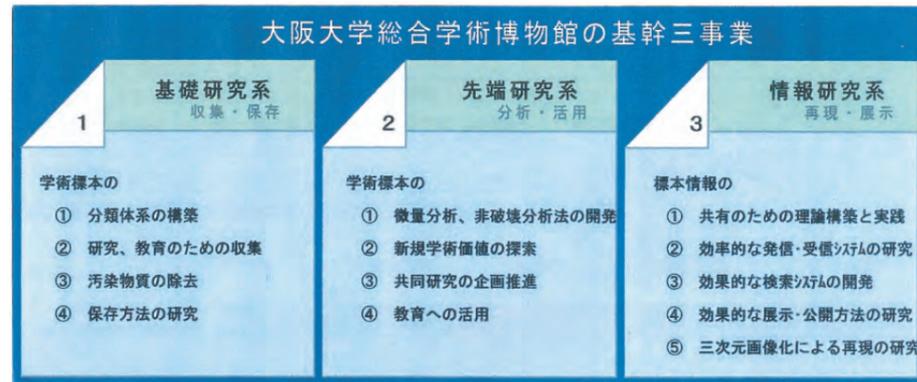
・樹幹が高く全体として明るいので、比較的多様な植物を観察できる。

### 待兼山の緑の維持管理全体方針

- ネザサ等がまとまった範囲で発生しているエリアは、年に1回程度、除草を行う。
- 図示の主要ルートを中心として、最小限の歩行ルートで除草し、倒木等処理を行う。ただし図示以外のヤブ等、刈っても効果が薄いと思われる部分は、当面の間、放置する。
- 除草は、晩夏～秋にかけて行う。この時期であれば、草本の希少種等が死滅する心配はなく、翌春に地面に光が当たることで、多様な種の発生が期待できる。
- ナツハゼ、ネジキ、シャシャンボなどの、里山になじみの深い中高木ぐらゐまでの樹木について、種子をまいたり幼木を植えるなどを試行・検討する。また、ドングリ系ではない実のなる木、たとえばマユミなどを植えることで、全体としての植生・昆虫や鳥類などを含めた多様性を豊かにすることが期待できる。



図a. 大阪大学総合学術博物館の事業(上)と役割(下)



- 凡例(図b)
- ネザサ等の植物の優占
  - 積極的に草刈りするべきエリア
  - 重要な環境学習フィールド・エリア
  - 最も重要な環境学習ルート
  - その他の環境学習ルート
  - 補助的な環境学習ルート

・一時期はセイタカアワダチソウ(外来種)が優占していたが現在はススキ(在来種)の草原となっている。植生の遷移を観察できる好例であるが、今後、晩夏～秋にかけて、毎年の草刈りを行うことが重要であると考えられる。  
・キヅタ、ナツツタがみられる樹木があり、観察と解説のフィールドとして適している。

・かつて園芸系植物が多く植えられていた痕跡がある。  
・昆虫等生物観察に適した広がりのあるフィールドで、秋に草刈りを行うことによって、今後より豊かな植生への移行が期待できる。  
・周辺に、カキの自生が増えている。

図b. 環境学習フィールドとしての待兼山







現状の課題

吹田キャンパスの門ならびにその周辺は、地域社会に開かれたキャンパスに相応しい景観を呈しているとは言えない。特に千里門は、歩行者や車両の主要な玄関口であるが、調整池（平成17(2005)年に最低限の修景がなされた）、狭隘な歩道、自動車のサービス路のために、殺風景な環境となっている。また、南側から東側にかけてのオープンスペースがアーバンティのある広場となることが望まれるが、現状では、東側の鬱蒼とした植栽が存置されたままである。

そこで、以下の整備を実施することにより、千里門からGSEコモン東側に連続するエリアを、誰に対しても開かれた、親しみのある外部環境として整備する。

計画の方針

1. 誰に対しても開かれたアプローチ空間

- ①千里門を広場化することにより、千里北公園との景観の一体化を図る。
- ②広場、ゆるやかな階段、スロープ、エレベーターなどを組み合わせることにより、誰に対しても気持ちよく移動できる環境とする。
- ③既存の植栽を整理し、見通しのよい開放的な空間とする。  
また警備員詰所のデザインと位置を改善し、総合案内所としての役割を持たせることにより、来訪者を最初に受け入れるわかりやすいエントランス広場とする。

2. アプローチ空間における3案の可能性

- ①A案 大階段タイプ  
広くゆったりとした階段による、風格のあるアプローチ空間、階段によるエントランス性の明示
- ②B案 雛壇広場タイプ  
地形に沿ったテラス状広場の連続、イベントなど幅の広い利用に対応
- ③C案 自然再整備タイプ  
既存の植栽の再整備・充実による、あまり大規模な工事をしないアプローチ空間の再生

3. アプローチ空間のデザイン（東西に連続する壁など）と一体となった門の整備

4. オープンスペースネットワークの形成

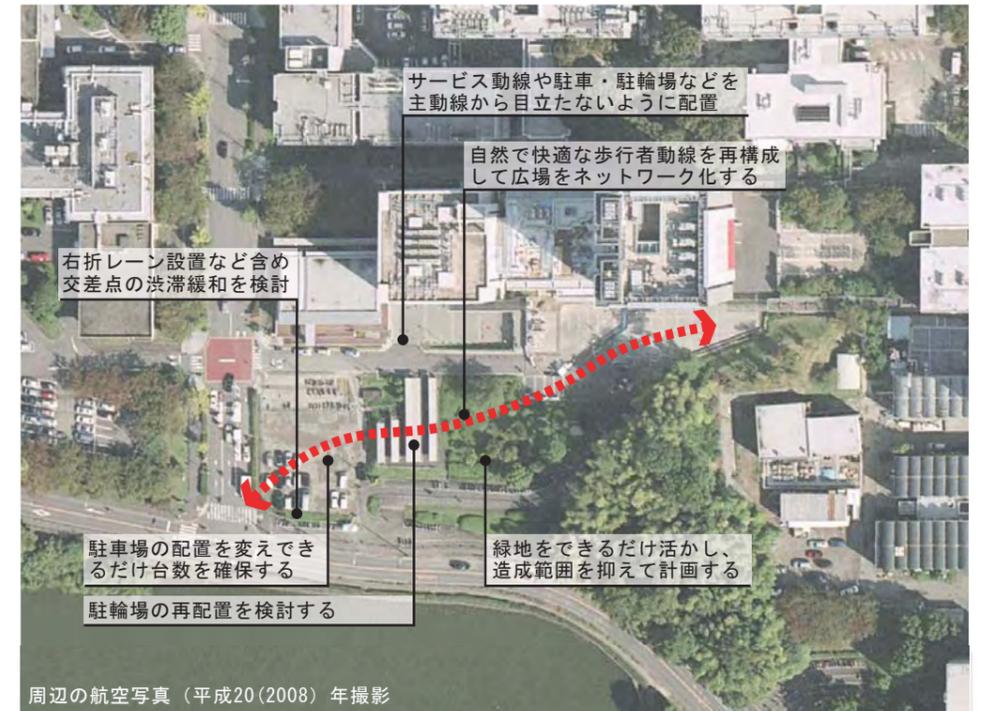
千里門アプローチ空間から工学U1M棟東側に連続するエリアの植栽を整理し、人が集まり、憩うことのできる広場とする。

5. 駐輪場・サービスヤードの充実と景観への配慮

工学U1W棟サービスヤードや駐輪場等と歩行者の主たるアプローチ空間を東西に延びる壁面や並木などの景観要素で分ける（アプローチ空間からのサービスヤードへの直接的な見通しを避ける）。



工学U1E棟東側のオープンスペースのイメージ



周辺の航空写真（平成20(2008)年撮影）



A案配置図



A案 南西方向からの鳥瞰写真



B案配置図



B案 南方向からの鳥瞰写真



C案 西方向からの眺め



現状の課題

樹林池と池のある広場には、大きく成長した樹木や低木・生垣で、視界的にも空間利用からも見通しが悪く、切断されていて、暗く感じる。同時に憩いや集いのための有効利用できる空間が少なく、水際も低木で仕切られ、親水性も生かされていない。

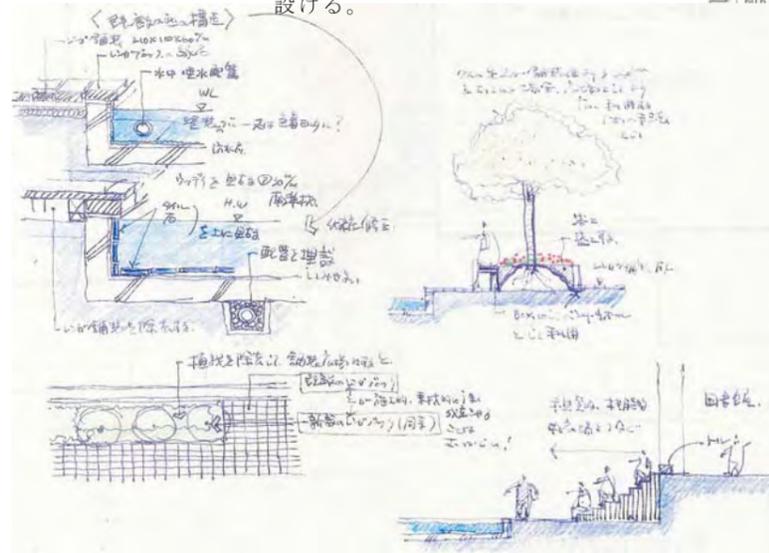
また、動線として中広場と図書館との機能的な軸が接続されていないので、利用者が積極的な参加が生まれにくい。

なお工学研究科内の重要な動線骨格をなしている回廊は、耐震性能の不足と老朽化の問題があり、順次撤去をする。本計画の検討に際しては、現在の鉄筋コンクリート製回廊に代わる、空間の骨格を形作る要素を新たに取り入れることも、合わせて検討する。

計画の方針

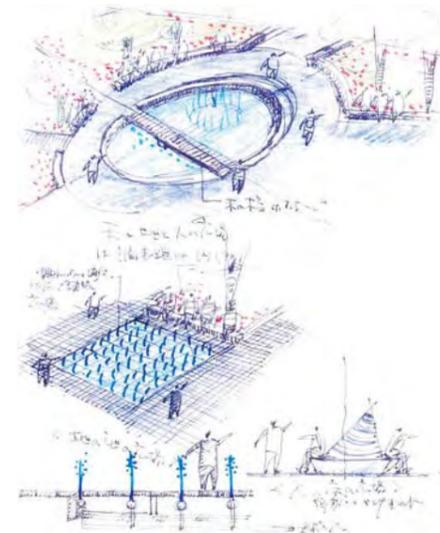
- ① 周辺との視界の広がり確保する。
- ② 参加・交流のできる広場をできる限り広くとる。
- ③ 水際と広場とを一体的空間として連続させ、親水性を高める。
- ④ 退官記念樹は原則として位置を変えないが、やむを得ない場合は移植を考える。  
名板柱は朽ちない素材（石・ステンレス等）で新しくデザインする。
- ⑤ 広場の舗装は新しく、レンガ系ブロック・御影石・ウッドデッキなど、親しみと安らぎのある素材でつくる。
- ⑥ 花ものの植物が少ないので彩りのある植物で補植し、四季感を創出する。
- ⑦ 連続するベンチ機能を多く作り、サインなどの装置についてもバランス良く設置する。
- ⑧ 噴水設備やレンガ舗装の再利用を重視して考える。ただし、水中に沈下する設備管、ブルーの塗装については美観上良くないので補修・取り替え等を行う。レンガ舗装も傷んでいるので、再利用は慎重に検討する。

A 案

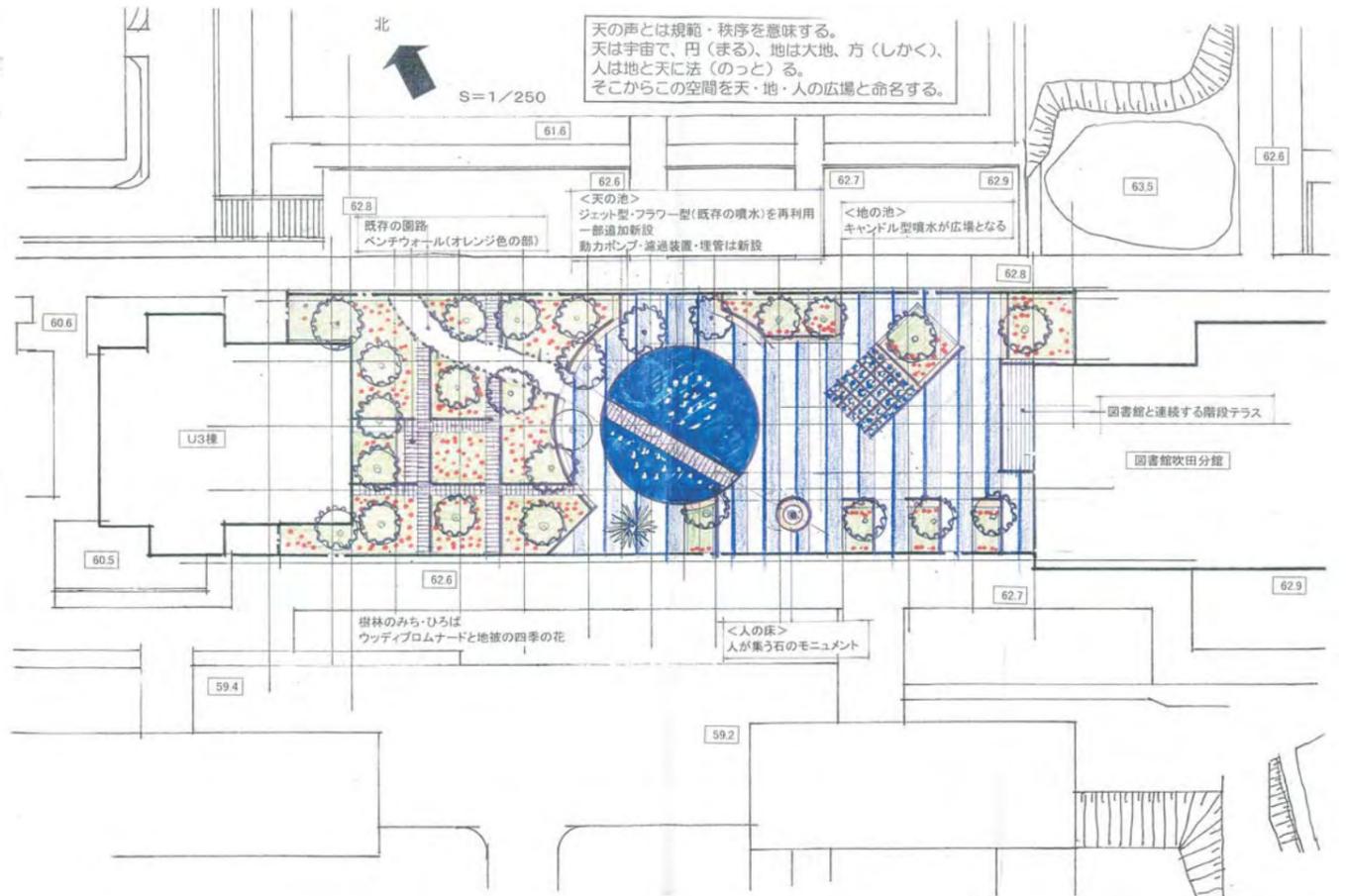
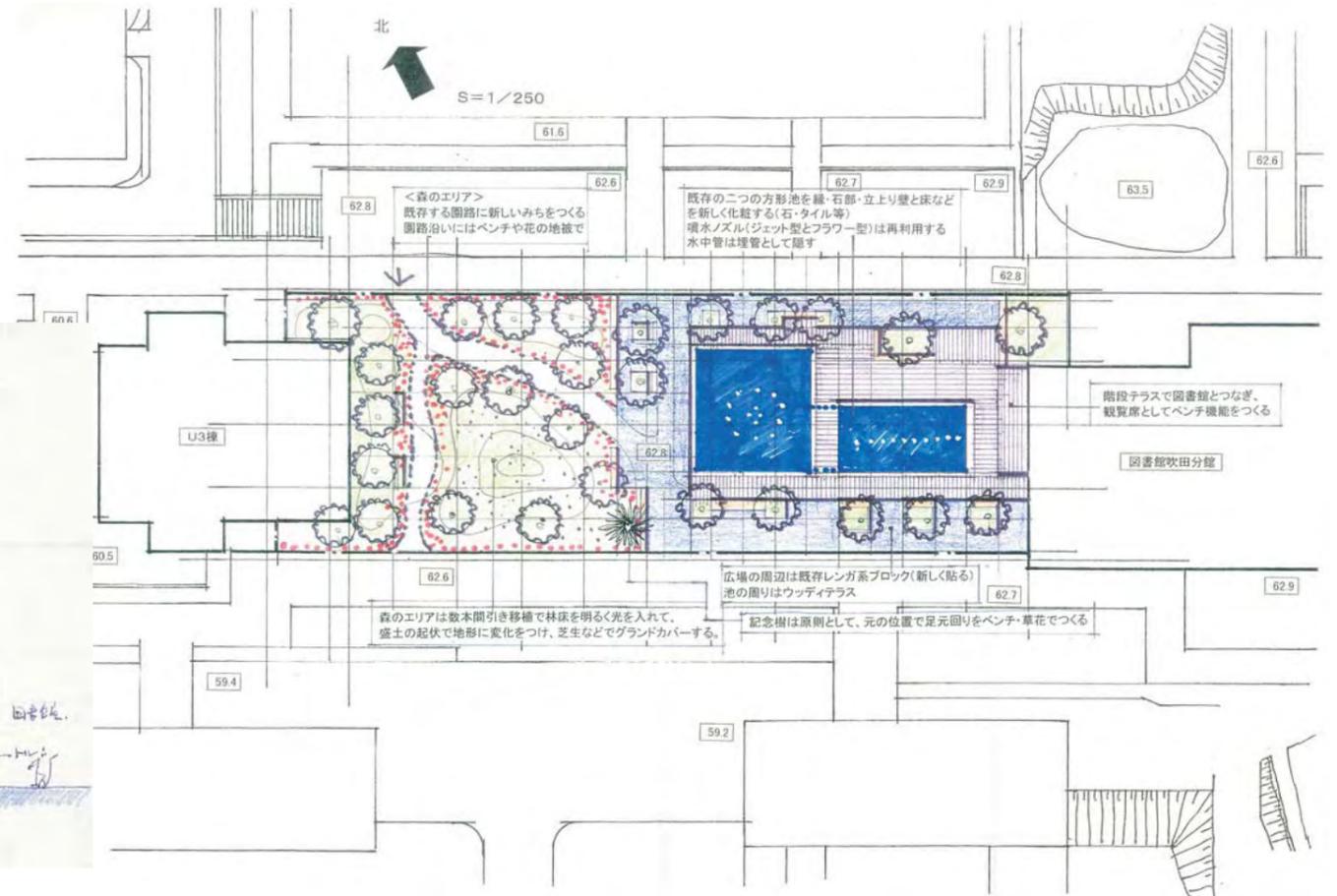


- ・既設の2つの池の位置と形状を残し、縁（エッジ）と立ち上がり、床の部分を化粧する（御影石・タイル等）。
- ・記念樹は、現在置を基本としてその回りをベンチウォール（御影石・木製）などで囲み、地被の花でカバーする。
- ・森のエリアは、高木が密植して暗いので、間引き、移植、枝打ちなどで松林を明るくして遠路、ベンチなどを設ける。

B 案



- ・既設の池とその周辺部を新しく作り変える案。
- ・キャンパスの通路・広場等は、周辺の建築の形態と同様に矩形で、優しいスラロームや円形などの空間形態・構造がない。ここでは、池の空間を、広場の中心に求心力のある円形で構成してブリッジを架ける。
- ・テーマを〈天・地・人〉として、利用できる空間の拡大と開放性の向上を図り、工学部オープンスペースのシンボル空間とする。
- ・森のエリアは、ウッドプロムナードで人を導き、地被の花でブロックガーデンをつくる。夜の照明、噴水を照らす水中照明などによる演出も考えられる。





建物（新築・増改築・改修）のデザインガイドライン

●オープンスペースとの連続性

シンボル空間、街路、広場など、キャンパスの骨格や交流軸に面する建物は、これらのオープンスペースに対して連続性・開放性を確保し、交流の機会やアクセシビリティを高める。

- エントランスや主要開口部から建物内の様子や活動がうかがい知れる透明性
- 建物低層部に交流スペース・共通スペース
- アプローチ部の小広場化、植栽の整理
- エントランス性の明示（入り口がわかりやすいデザイン）

●景観の文脈の尊重

スカイラインや壁面線など、キャンパスの景観の文脈や秩序を読みとり尊重する。また、周辺建物群の形態、空間構成、外装材、色彩などについて、基調となっているものを分析し、建物のデザインに活かす（同調または対比）。

●図となる建物

交流施設や福利厚生施設など、公共性の高い建物は、周辺環境との調和を保ちつつ、個性的なデザインになるよう工夫する。外観の一部に、アクセントとなるような形態や外装材を取り入れて、華やかさを持たせてもよい（奇抜としないよう配慮する）。

●地となる建物

一方一般の研究棟や講義棟のデザインは、基調となる既存の建物と同調させ、キャンパスの地を形成するよう配慮する。外観には、キャンパスや部局の基調となる形態・外装材・色彩を採用する。但し、手すり・建具・屋外階段など、小さなデザイン要素にはアクセント色を採用し、適度な華やかさを持たせてもよい。

●リニューアルの成果の表現

主要な建物を改修する際には、ファサードの一部に、新しいデザイン要素（外殻フレーム、バルコニー、庇など）を用い、新しい建築要素による表情豊かで秩序ある外観の計画を検討する。

●共通スペース・交流スペースの充実

建物の新築・改修時には、適切な位置に、学生・教職員の交流スペースや、教育・研究のための共通スペースを確保する。

●長く実効的に使用できる配慮

汚れにくく、維持管理のしやすい材料・構法・デザインを採用する。また、将来の用途変更や、先進的な教育・研究に対応できるよう、講義・演習・研究スペースにフレキシビリティを確保する。

●ユニバーサルデザイン

バリアフリーやわかりやすさに配慮する。建物の改修時には、エレベーターの整備改修、段差解消、廊下幅員の改善、便所の改善などを実施する。

●防犯性への配慮

事務室・居室からの見守り（エントランスや外部空間に視線の届く空間構成）の確保、建物内外への防犯設備の導入など。



スカイライン・壁面線に配慮された秩序ある景観（慶応大学藤沢キャンパス）



歩行者空間との親密な関係（立命館大学草津キャンパス）



図となっている建物（食堂と図書館）（ユトレヒト大学）



エントランスホールにつくられたカフェ（ユトレヒト大学）



開かれた表情の実験施設（ユトレヒト大学）

オープンスペースのデザインガイドライン

●キャンパスの骨格への配慮

シンボル空間、エントランスゾーン、メインストリート、副次的ストリート、広場、緑地などのデザインには、キャンパスの骨格形成のために定義づけられた役割を果たすことが求められる。交流のための広場、シンボルストリートの形成など。

●広場のデザイン

交流の場、シンボルとしての広場など、役割に対応したデザインが求められる。広場自体の形態だけでなく、建物・街路・自然など、周辺環境との関係に配慮する。

- 集える場所、憩える場所：株立ちの植栽、舗装・芝生の整備、座れる場所・ベンチ、
- 景観：見通し、建物・植栽などによる囲まれ方、風景の活かし方
- アイデンティティ：舗装、形態、沿道の建物、モニュメント、ネーミングなどによる個性化

●街路のデザイン

交流の場、自然を楽しむ場、シンボルとしての街路など、役割に対応した総合的なデザインが求められる。

- 交流：建物と街路の親密な関係（視線の透過性、アクセシビリティなど）、オープンスペースのネットワークに対応した街路と広場との連続性
- 自然：視点場、法面・擁壁、街路樹などの整備
- 交通の役割に対応したデザイン：歩車分離/融合に対応したデザイン、歩車道比率、車速を抑えるデザイン
- 景観：D/H・スカイライン・壁面線への配慮、建物のデザインガイドラインと連動
- アイデンティティ：舗装、デザイン、建物、植栽、街路樹などによる個性化

●維持・管理に配慮した植栽の計画

適切な配置・樹種・剪定方法・ボリュームの組み合わせによる計画

●ユニバーサルデザイン

段差解消、屋外へのエレベーター設置、建物内エレベーターの利用など

●ストリートファニチャー

サイン、ベンチ、照明、自転車置き場、ゴミ箱、ゴミ置場、バス停屋根、渡り廊下屋根などについて、優れたデザインの導入と統一。

●駐輪場の計画

駐輪場は建物一棟または数棟単位で、所要台数を確保することが望ましいが、豊中キャンパスにおいては、キャンパス全体の集約駐輪場の計画も検討する。



建物に囲まれたモール（京大桂キャンパス）



”間”を大切にしたいアプローチ空間とプラザ（慶応大学藤沢キャンパス）



内と外のつながりを重視した建物のデザイン（慶応大学藤沢キャンパス）



駐輪に対して配慮のない計画



”間”の少ないアプローチ空間（留まるための場所がない）



障害物のある歩行空間

閉じた表情の共通施設



公共性の高い建物でありながら貧弱でバリアのある歩行空間

現状の問題



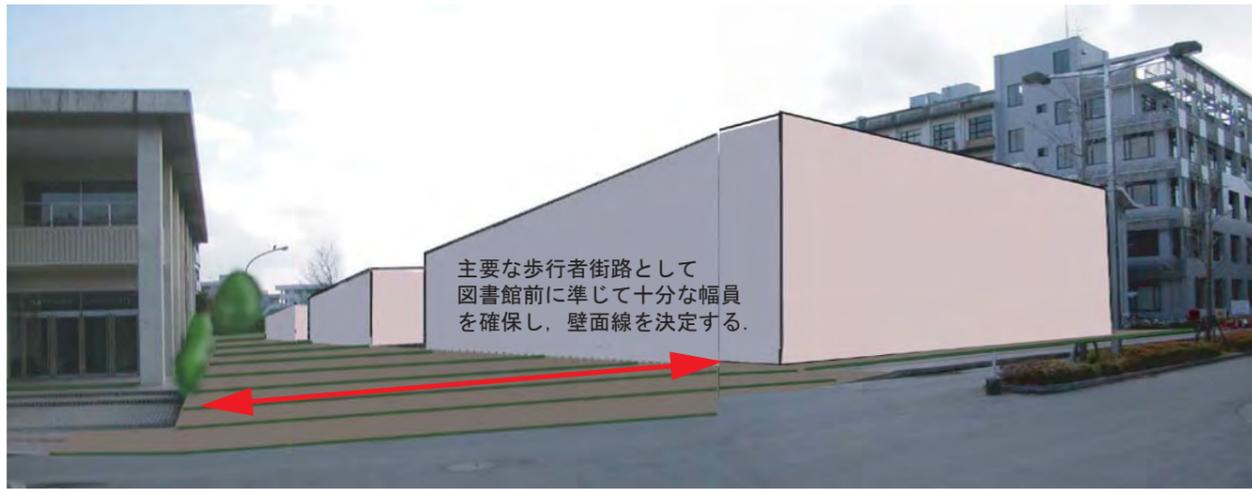


A. 圧迫感を与えない建物ボリュームの考え方 (歩行者動線・広場に対する配慮)

(1) 建替え時に建物ボリュームの圧迫感に注意すべき場所の例 (科学教育機器リノベーションセンターA棟付近)



科学教育機器リノベーションセンターA棟付近を大通りから見たところ：重要な歩行者動線にあたるこの場所では、将来計画での建て替えに伴う圧迫感が懸念される。



日影検討によって求めた、景観上望ましい建て替え可能ボリューム：街路を18mの歩行者専用道路と考えたときに、約半分が冬至でも4時間日照を確保できることを求めると、このブロックでは分節された低層の建物が望ましいといえる。

<日影検討から求めた結論>

- 重要な歩行者街路にあたるブロックでは、建物が圧迫感や暗さを与えない程度のボリュームとしなければならない。具体的には $D/H=0.7$ 以上とすること、および街路の半分で冬至に4時間日照(測定面=GL+4m)を、できるだけ確保することを目指す。
- 上記に則して壁面線を決定し、将来にわたってこれを守る。
- 街区ごとに統一感、リズム感を生むように計画する。

(2) すでに建物ボリュームが街路等に圧迫感を与えている場所の例

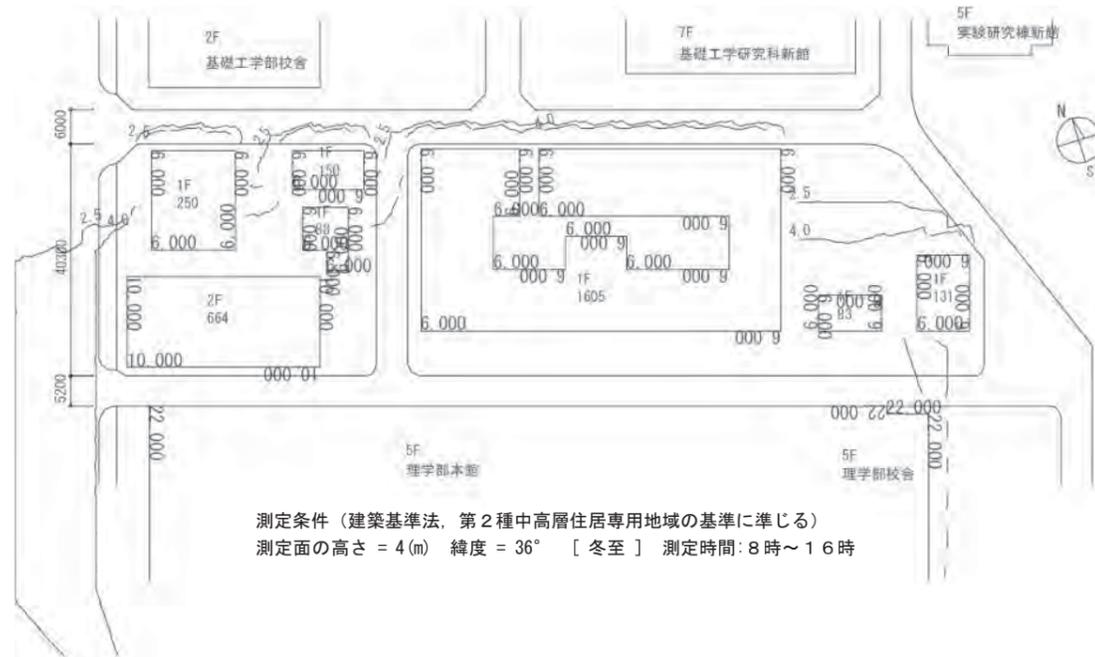


1. 主要な歩行者街路に大きく影を落とし、かつ圧迫感も大きい。この場所の $D/H$ は、道路敷までで $0.7$ 弱である。最低限、舗装をソフト感のあるものに変えてゆくなど可能な限り歩行者の快適性を高める工夫が必要。
2. 高密度の利用が必要である場合も当然あるが、主たる歩行者動線はこのような高密度であってはならない。
3. 高密度に建て迫った街路。路上駐車も大変多く、陰鬱な感じが強い。
4. 街路の南側に7層の建物があるので、日影が大。今後この街路に面して計画される建物は、複合日影を考慮して、十分な棟間隔をとって計画し、街路がこれ以上暗くならないよう配慮する必要がある。

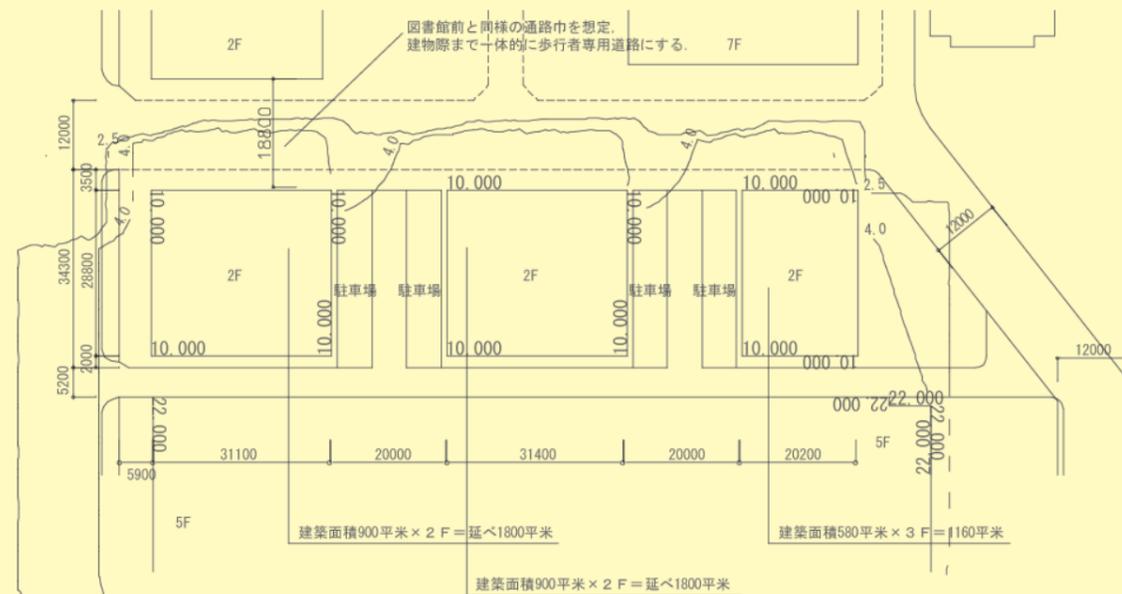


(3) 科学教育機器リノベーションセンターA棟周辺における日影によるボリューム検討の例 (1/1200)

a. 現況 (計2970㎡) : 低層なので明るい、街路の中央で、4時間日影。これを目標の明るさと考える。



b. 低層 (2階建て) を3分棟で建てた場合 (合計: 4760平米) : 低層を分棟化することで、現状と同等の明るさを得られる  
それでも現況科学教育機器リノベーションセンター周辺の1.6倍の床面積を確保



<日影検討から求めた結論(再掲)>

- 重要な歩行者街路にあたるブロックでは、建物が圧迫感や暗さを与えない程度のボリュームとしなければならない。具体的にはD/H=0.7以上とすること、および街路の半分で冬至に4時間日照(測定面=GL+4m)を、できるだけ確保することを目指す。
- 上記に則して壁面線を決定し、将来にわたってこれを守る。
- 街区ごとに統一感、リズム感を生むように計画する。

B. 街路に応じた歩車道の考え方

(1) 魅力的空間となっている場所や要素の例



- レンガや石などの美しいペイプメント (舗装) は、歩行者専用空間であることを強くアピールする。
- 裏道的な場所であっても、アイストップは景観上十分に有効である。
- 科学教育機器リノベーションセンターと基礎工の間の街路からは、待兼池周辺がアイストップとして目に入る。

(2) 見直しが必要な場所の例



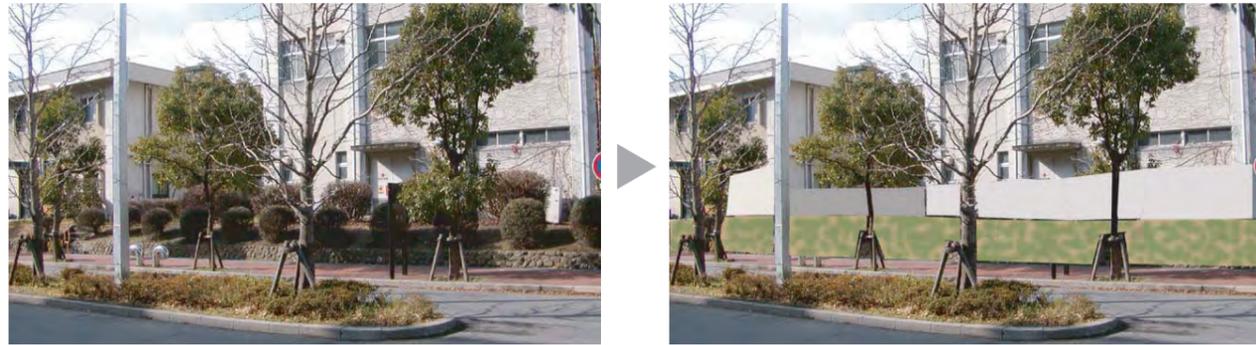
- 人の賑わいがある場所だが、重要な車動線にもあたるため、歩車分離を進める必要がある。

C. 植栽と街路の関係性

(1) 見直しが必要な場所の例



- 歩道の高木、低木、建物足下の中低木と、3層以上の重層的な植栽で、閉塞的な感じがする。
- 同様のことは、オープンスペースにも言える。現状の植栽は街路に対して閉鎖的で、重く暗い。



植栽が過剰に重層的で、街路と建物敷が分断されているので、現状の植栽をある程度残しながら、中低木を中心に整理撤去して見通しを確保し、芝やタマリユなどの地被類や草本植物を多く取り入れる。また、道路と建物敷の段差が大きい場所では、石積みや小擁壁類を極力廃止して、街路との親和性、一体性を高める。

#### D. 中庭の計画指針 (将来の新規・改修)

##### (1) 見直しが必要な場所の例



1. 宇宙・地球科学科棟中庭: 非常に閉鎖的な空間。右の化学・高分子棟入口と2層分程度のピロティでつながっておけば、見通しとともに、人の往来が生まれるので、改修の機会があれば検討の価値はある。

##### (2) 魅力的空間となった場所の例



1. 全学教育棟群の中庭は、それぞれの建物の入口や動線と適切に接続され、空間が人々の活動に適した設えとなっている。
- 2, 3. スチューデントコモンズ前の広場も、樹木が適切に間伐されるとともに、建物が広場に対して開放的に整備されて、有効に活用されている。

#### E. 建物入口と街路の関係性

##### (1) 見直しが必要な場所の例



1. 大通りに背を向けた位置に入口があり、孤立感のあるオープンスペースになっている。改修の機会があれば、中庭とのピロティによる連絡を検討する価値があると思われる。
2. 街路から遮断されるように計画され、街路との親和性・一体性を欠いている。植栽の一部撤去と、歩行者仕様の舗装を車道へ伸ばす工夫だけでも人を呼び込むことができる。
3. 入口が街路から引き込み過ぎて、内向きな空間を構成している例。庇の形状や舗装の工夫などによって、街路に対して正面性をアピールする設えが必要である。
4. 通り抜けによって、人を呼び込む設えであるが、重苦しい。
5. 街路からの引き込みを工夫している例であるが、天井高さが低く薄暗いのが惜しい。



A. 街路：歩行者系

(1) 空間構成の改善が必要な場所の例 (庇のある直線的な歩行者通路)



せっかく池と緑のある中庭に沿っているのに、生垣によってオープンスペースとの関係性を絶たれ「眺める庭」になっている。一体的な舗装を施し植栽の配置を変更することで、オープンスペースと一体となったアメニティのある遊歩道となる。



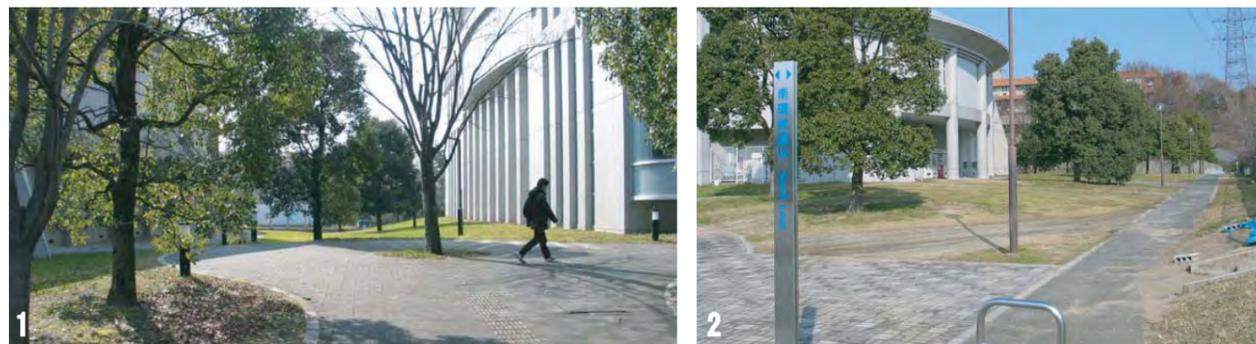
(2) メンテナンスによって改善が可能な場所の例



1. 通路と植栽が、生垣と側溝によって分断されている。
2. 中心部から離れたのどかな印象の歩道であるが、舗装や植栽のメンテナンスが必要。
3. 遊歩道として整備されているが、植栽のメンテナンスが行われていない。



(3) 魅力的空間となっている場所の例



1. 緑と遊歩道が一体化して魅力的な空間が形成されている。
2. 通路と植栽の間に明確な境界がなく、緑をより身近に感じることができる。



本部前の広場・南側の通りは、歩道や花壇、スロープなどの整備を行うことにより吹田キャンパスの顔となる華やかな空間に生まれ変わった。今後、北側の街路との関連性をさらに強めることで、キャンパスの中心としての位置づけをより向上していく。

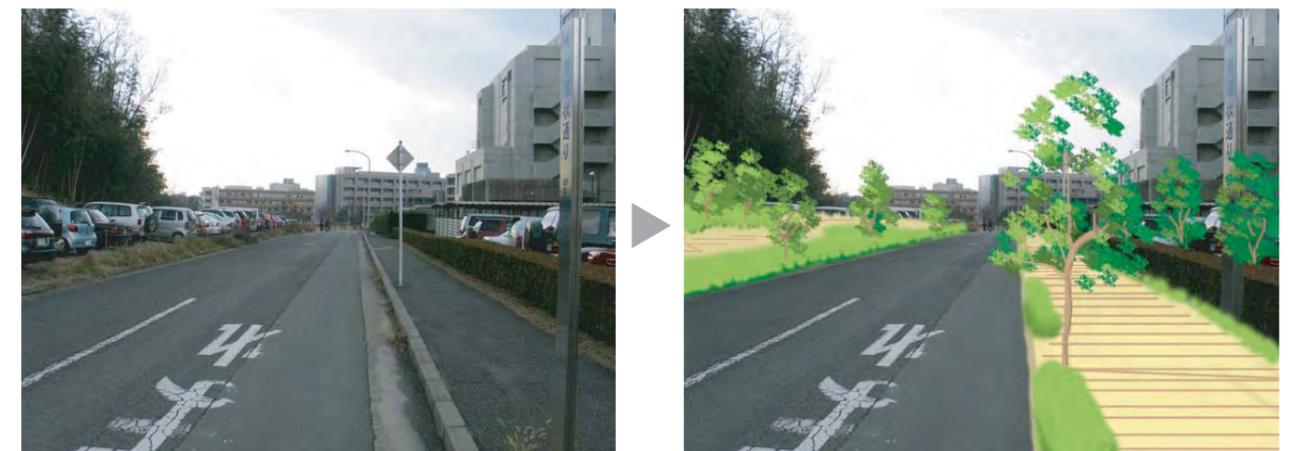
(4) その他見直しが必要な場所の例



1. 幅の広い植栽帯を活かせていない、直線的な歩道。
2. 裏道を上がっていくような印象である、キャンパス中央から工学部へのアプローチ。駐車場の中を通過してアクセス。
3. ほとんど手つかずで荒れた通路

B. 街路：自動車幹線系

(1) 見直しが必要な場所の例 (歯学部系横の車道)



メインストリートから入ってすぐの自動車道であるが、両側が駐車場になっていて並木もない。道路標示もはげている。駐車場との緩やかな緩衝帯として、並木は不可欠な要素。魅力的な遊歩道を組み合わせて、人が快適に歩ける道にする必要がある。



(2) メンテナンスによって改善が可能な場所の例



1. 2列の並木の密度が高すぎて、鬱蒼とした印象を与える。交差点の舗装色が景観を損ねている
2. 密に植わった緑が壁となり、道路と周辺の関係性が絶たれている。

(3) 魅力的空間の例



1. 植栽や建物とのバランスがよく取れている並木道。
2. 開放性の高い並木と広場が道路と建物の関係を良好に保つ。
3. 正門としてのシンボル性が求められるアプローチ部分は常に質の高いメンテナンスが施されている。
4. 一体的に整備された並木と正面の大木のアイキャッチがシンメトリーを強く感じさせる、非常に並木道らしい道路となっている。

(4) 魅力的であるが見直しも可能な場所の例



1. 美しいアイストップがあり、緑や歩道の整備もできているが、右側の駐車場が未整備な印象が強調され、バランスを欠いている。
2. 4車線並の大通りであるが、全体に閑散とした印象である。周辺建物との関係性を考慮した植栽配置を行い、アイキャッチや中央植栽帯などのアクセントを設ける必要がある。

C. 広場

(1) 見直しが必要な場所の例 (人科系建物前のオープンスペース)



正門からのアプローチがメインストリートと交わるコーナーに位置し、反対側には生命科学図書館のシンボル性の高い建物が建つ高ポテンシャルなオープンスペースであるにもかかわらず、周囲は生垣によって完全に閉ざされている。またオープンスペース自体も整備が十分でなく、魅力に乏しい空地となっている。キャンパスイメージを印象づける重要なオープンスペースと位置づけ、メインストリートに開かれた、並木などと一体的な整備をはかる。またスペース内にモニュメントやアメニティ施設などを整備し、キャンパスの潤いを創出する。

(2) 魅力的空間となっている場所



1. 医学部のシンボル広場であるホスピタル・パーク
2. 医学部の威厳を示す、前庭としての芝生。広場というよりは見せるための庭として機能している。

(3) 魅力的、またはポテンシャルが高いが、さらに見直しが望まれる場所の例



1. キャンパス全体の中心、イメージの核、賑わいの核となるべき場所が駐車場として利用されている。
2. 図書館と回廊に囲われた中庭だが、それらとの関係性は薄く、魅力に乏しい
3. 工学部系の中では最も賑わいのある広場であるが、舗装・植栽配置・ストリートファニチャーといった広場を形成する各要素に一体的な調和が感じられず、キャンパスの主要な広場としては、魅力に乏しい。



(3) 魅力的、またはポテンシャルが高いが、さらに見直しが望まれる場所の例 (つづき)



4. ただでさえ暗くなりがちなピロティの広場が、掲示板に囲われより暗く、閉鎖的な印象になっている。
5. 入り組んだ工学部の建物配置から生まれる中庭。植栽や舗装を工夫することで、変化に富んだ魅力的な広場とすることができる。
6. UIE棟の大階段・デッキスペースの前が、臨時とはいえ駐輪場となっている。オープンスペースのコンセプトが全く活かされていない。
7. 広い空地を用意しただけでは広場にはならない。



D. アイスストップとしての施設配置

(1) 改善が可能な場所の例 (キャンパス南東部の施設開発用地)



この場所に計画される施設には、アプローチからのアイスストップとしての役割と、周辺一帯の景観を統合する求心的デザインが求められる。

(2) 魅力的な空間構成となっている場所の例



1. 生命科学図書館が正門からのアプローチを受け止めるアイスストップとなっている
2. 上りのアプローチの正面という、アイスストップとして格好の位置に建つレーザー研の施設であるが、魅力の乏しいものとなっている。
3. アプローチに対して正対していなくても、建物の形状やデザインによってはアイスストップとなりうる。
4. シンメトリー性の強い並木道を、歯学部が真正面から受けている。

E. 幹線街路から引き込まれた建物の構え (工学部・産研・微研などのアプローチ空間)



各街区の主要な入り口が、幹線街路から引き込まれた奥行きのあるアプローチとなっている。歩車分離や駐輪の整理などをできるだけ整理していきながら、これらの基本的な空間構成は受け継いでいかなければならない。



### 7-3. キャンパスアクションプラン（その1）

直接的な施設整備ではない種々の取り組みや活動によって、キャンパスの維持管理機能や、快適性および周辺環境などを適正に保つ一助とするための、実行計画のメニュー提案を行う。（なお平成17(2005)年版キャンパスマスタープラン・平成21(2009)年策定キャンパスマスタープランにおいて、これらは単に「アクションプラン」として記述されていたが、今後は「キャンパスアクションプラン」とよぶこととする。）

2005年版においては、図のような1)~3)の枠組みのイメージがしめされた。各項目の内容については、次ページの一覧表を参照されたい。次ページの表ではこれまでの成果や実績を参照しながら、今後のとりくむべき方向性を示している。

## 1) 大学が主として行う取り組み

従来からの施設マネジメントであるが、その場限りの対策を行うのではなく、中長期を見据えた先見性のある施策と、統合的かつ柔軟な運営が求められる。

※ 図中の1)~3)の位置づけは、必ずしも明確・固定的な分類ではなく、あくまでイメージの一例を示している。場合によって、図とは全く別の場所に位置づけられることもありうる。

**大学シンボルの形成**

**レンタサイクル制度**

**HANDAI CAMPUS DESIGN ユーザー参加型点検評価**

**特色ある各種のキャンパスマップ整備**

**キャンパス生態系保全プログラム**

**キャンパスレンジャー**

**リサイクルクラブ**

**防犯パトロール活動**

**コミュニティバス (学内バス・医療循環バス等)**

**アート・インスタレーションイベント**

**コミュニティガーデン**

**里山学校**

**植物探検隊 @秋の待兼山を訪ねて**

**中山池と里山を使いこなそう**

**地域と連携・交流したイベント活動**

## 3) 地域、社会、産業と連携していくための取り組み

サテライトキャンパス、インターンシップ、ベンチャーインキュベーションを展開しながら、地域への様々な働きかけや施設開放、地域からの提案やキャンパス計画への参画などの相互交流をはかりながら取り組んでゆくべき課題である。行政との協働や、都市計画においてキャンパスの役割を位置づけることも考えられる。

## 2) サポート型（参加・提案型）の取り組み

学生や教職員などの活動による、大学組織が直接的に関与しない学内NGO的なマネジメントの形態。大学としてこれらを支援していくことで費用対効果の高い維持管理機能を期待できるとともに、大学運営への参加意識と大学に対する誇り・愛着を高める効果や、学内・地域コミュニティの醸成効果を期待することができる。また学生、教職員の参加によるデザイン検討や自発的なマネジメント提案があればそれを支援するなど、継続的に意見を汲み上げてゆくしくみが求められる。

図 キャンパスアクションプランの諸項目とその位置付けイメージの例※



7-3. キャンパスアクションプラン（その2）

表. キャンパスアクションプラン一覧（※印は、2009年策定の箕面キャンパスマスタープランにおいて記述されたもの。それ以外は2005年策定のマスタープランによる。）

	取組みの性格分け (○ … 結びつきが強い △ … やや結びつきあり)			平成17(2005)年版キャンパスマスタープラン(豊中・吹田) および 平成21(2009)年版箕面キャンパスマスタープラン における定義・解説等	大阪大学全体のなかで2005年以降に状況が 変わった事項など ( )内は付帯的状況		今後より強く望まれる追加的提案事項
	大学が主として行う 取組み	サポート型 (参加・提案型)取組み	地域、社会、 産業と連携 してゆくための 取組み		☆ … 平成21(2009)年以降に新たな実績がある ○ … 状況好転または実績あり △ … やや好転またはやや実績あり × … 状況が悪化している		
コミュニティバス	○	-	△	現在キャンパスの空地の至る所が駐車場と化している状況は誰も好まないと認識しているわけではない。コミュニティバスはキャンパス内と最寄り駅を循環するもので、パークアンドライド方式などの入構規制の導入とともに検討の時期にきている。	○	スクールバスが運行されている。ダイヤの適正化や増便の要望も多いが、毎年、学生の意見を聞いて予算の範囲内で改善が図られており、良く稼働している。 箕面キャンパスでは、旧大時代時に千里山バスによる通勤通学の足として、バス路線のない経路からの運行を行っていたことがある。	引き続きダイヤや便数の改善を検討するとともに、新規ルート開拓の可能性も模索する。医学部附属・歯学部附属の両病院と最寄駅等をつなぐ医療バスも需要が高いと考えられる。
大学シンボルの形成	○	△	-	アンケートによれば現在のキャンパスには阪大をイメージできるような施設や場所が乏しく、シンボルになるものを望む声も多く見られる。それには単に施設を建設するのではなく、適塾や懐徳堂、湯川記念室など阪大にゆかりのある資源を如何に活用するかが重要である。とりわけ大学の歴史や伝統的資源を集約し、広報していくことが望まれる。	○	平成23(2011)年春に、旧イ号館が大阪大学会館として整備され、合わせて学生交流棟北側が広場として整備された。また中山池も周回遊歩道などが同時に整備されている。 吹田キャンパスには平成18(2006)年に、本部棟南側広場が整備された。 箕面キャンパスには、外国学図書館とA棟・B棟で囲まれたシンボル性豊かな広場と、素晴らしい眺望をもつ大階段が存在する。	イベント等ともあわせ、学生の自主性を支援するしくみを探り入れることを考えたい。
レンタサイクル制度	○	△	△	キャンパス内の自転車の数は豊中において既に歩行者空間を埋め尽くすまでに至っている。本来、通学・通勤の足としてキャンパス内の移動手段として、最適な乗り物であるはずのものが、その量の多さと駐輪スペースの少なさから問題となっている。レンタサイクル制度の導入によって必要な場所に必要だけの自転車を利用できるようにその循環のシステムを考えて配置し、キャンパス内における自転車の総量を規制する。	-	(豊中キャンパスにおいては阪大坂の自転車進入規制(賛否はあるものの)キャンパス内の駐輪減少と事故減少には大きく寄与した。 箕面キャンパスでは、旧大時代時に不要となった電動アシスト自転車を利用して、レンタサイクルの利用を行っていたことがある。)	学内専門家のノウハウ提供やコンサルティング参加が望まれる。
回遊散策路の構築と開放	○	△	△	施設の開放と防犯安全対策は矛盾しやすい条件である。学内の危険な場所に適切な対策を講じるとともに、日常の点検評価が重要である。コミュニティや人の目の存在もまた、物理的対策と両輪をなすものである。	☆	中山池を周回する遊歩道が、石橋3丁目自治会、石橋水利組合、池田市、大阪府との協力により、平成23(2011)年春に完成した。	活用方針や維持管理等についても、地元等と連携することが望ましい。
キャンパス生態系保全プログラム	○	○	△	火を使って良いルール、木を切って良いルール、剪定のルールの策定、植栽計画コード、里山形成プログラム、営育成の可能性検討などが考えられる。	☆	平成23(2011)年に緑のフレームワークプランが策定された。 豊中キャンパスでは柴原町タケの会と連携したイベント・清掃・間伐活動などが行われている。 箕面キャンパスでは、環境サークルGECESが、彩都との境界に位置する樹林地・河川・彩都西部中央公園を主フィールドとした環境学習活動の運営協力を行っている(主催は彩都協議会)。	緑のフレームワークプランの整理加筆修正、および里山保全プログラムにより、イベントと連動したより実効的なしくみの確立が必要。 (近年、牛や山羊の放牧による除草が、国内外で注目をあつめている。グランド等広い面積の芝生(他、地被類)化と合わせてシンボル形成に寄与できる可能性もある。)
特徴のある種々のキャンパスマップ整備	○	○	△	生態系マップ、アートマップ、ハザードマップ等の整備や絵葉書の作成、販売等を通して大学の現状を把握し、広報に繋げる。	△	障害学生支援ユニット、CSCD、安全衛生管理部、キャンパスデザイン室などでいくつかの試みがなされている。2012年2月現在、障害学習支援ユニット、工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻、キャンパスデザイン室と連携して、バリアフリーマップの作成を検討している。	これらを活用した広報の充実や、諸団体の有機的なつながりが期待される。
ユーザー参加型点検評価	△	○	△	学生や教員が普段利用する研究棟内を定期的に点検するキャンパスバトロールや点検評価チェックシート、利用者アンケートによるデータを公開することで定期的に改善提案を汲み上げ、リニューアルにつなげていくことが重要である。	☆	施設マネジメント委員会・施設部により、各部署への点検評価照会(アンケート形式)やキャラバンが行われている。2010年にはキャンパスイメージアンケートや、構内交通安全に関するアンケートなどが実施された。また、学生生活調査や留学生生活調査も行われている(3章参照)	学生が主体的に企画・提案するワークショップ的活動の萌芽がみられる。教職員や学生による自主的な諸活動を、大学として支援していくしくみが求められる。
キャンパスレンジャー	△	○	△	大学キャンパスはアンケートでも指摘されているように、維持管理が適切に行われているとはいえない状況である。これは単に環境美化に要する経費の問題だけではない。学生や教職員の環境美化に対する高い意識が必要であろう。キャンパスレンジャーは学生や教職員が有償ボランティアとして組織し、バトロール、屋外清掃、大学来訪者へのキャンパスツアー、キャンパス改善提案など幅広い活動を行うもので、自ら率先して環境美化を行うことで、参加者のもとより、その活動を見る者への啓蒙にもなり得ると考えられる。また大学側も積極的に支援することが望まれる。授業の課題として取り組むことも考えられる。	△	箕面キャンパスでは、旧大時代において、学生教職員が参加し、構内の除草及び清掃を月1回程度実施していたことがある。 (障がい者雇用の一環として、エコレンジャーによる取り組みが開始されている)	有償ボランティア・アルバイトの形態をとることで、費用はかかるものの対効果の大きい成果が得られる可能性がある。 ただし、留学生にあっては母国の文化により参加できない場合があり得る。そうしたときに不利を被らないような、自由を尊重する配慮が必要である。
地域と連携・交流したイベント活動 ※	△	○	△	箕面キャンパスでは、毎年7月上旬頃の土曜日において夏祭りを開催し、フリーマーケットや盆踊りを実施して付近住民の参加も盛んである。 様々なアクションプランの素地となりうる活動である。	☆	箕面キャンパスでの間谷地区との夏祭りのほか、豊中キャンパスでも柴原町タケの会と連携したイベント・清掃・間伐活動などが行われている。	地域と連携・交流したイベント活動は、様々なアクションプランの素地となりうる活動であり、今後大学としてのサポートを改めて検討してゆく必要がある。
地域の清掃・美化活動への参加 ※	△	○	○	(構成員が近隣の地域に対しても意識を高める効果があると考えられる)	☆	豊中キャンパスでは柴原町タケの会と連携したイベント・清掃・間伐活動などが行われている。	諸活動を、大学としてサポートしてゆく姿勢が求められる。イベントや有償ボランティアと関連させて企画してゆく必要がある。
防犯バトロール活動 ※	△	○	○	(箕面キャンパスでは、近隣住民からこれを要望する意見があった)	-	(平成21(2009)年策定の箕面キャンパスマスタープランで提案された。)	同上
アート・インсталレーションイベント	△	○	○	オープンキャンパスや大学祭に合わせて実施し、キャンパスを地域に開放する。 地域の芸術家の協力を求めるとともに、ピエンナーレ形式で優秀な若手芸術家を表彰する場を提供する。	○	CSCD、21世紀懐徳堂、総合学術博物館等で様々な取り組みが行われている。	さまざまな活動を企画する諸団体の有機的なつながりが期待される。
里山学校	△	△	△	キャンパスの自然豊かな特性を生かし、動植物や農林業に詳しい地域住民や学生、教職員らのボランティアを募り、キャンパス内を広く市民学習の場として開放し、イベント等を支援する。	○	21世紀懐徳堂主催、総合学術博物館共催による植物探検隊は、平成23年秋の開催で第6回を迎えている。そのほか単発イベント的なものも、いくつか試みられている。	緑のフレームワークプランの整理加筆修正、および里山保全プログラムにより、イベントと連動したより実効的なしくみの確立が必要。
リサイクルクラブ	△	○	△	大学生協や環境資源委員会の支援、ISO14000sの導入、フリーマーケット、バザー等のイベント支援など	☆	生協において紙製弁当箱を使用して、リサイクルを行ったり、学生サークルでもPRなどの活動を行っている。	さまざまな活動を企画する諸団体の有機的なつながりが期待される。
コミュニティガーデン	△	△	○	リザーブ用地や荒れている既存の植栽部分などを学内外の有志にレンタル・アドプトすることで美しい庭園を再生させる。	△	工学A1棟周辺などでは、教員が自主的に植え、管理しているアジサイなどがみられる。	教職員や学生が自主的にキャンパスを花・緑で美化する活動を、大学としてサポートしてゆく姿勢が求められる。